

Edmund White, *Genet*, London, Chatto & Windus, 1993.  
(traduit de l'anglais par Philippe Delamare, Gallimard, 1993.)

荒木 敦

ジャン・ジュネは1986年4月、パリの小さなホテルの一室でひとり息をひきとった。残された作品をめぐっては、これから更に多様な読解の可能性が追求されてゆくことだろう。そして、死の七年後に出版されたこの伝記は、サルトルの『聖ジュネ』(1952)やデリダの*Glas*(1974)と並んで、今後ながくジュネ研究の古典としての位置を占め続けるだろう。

伝記を書いたエドモンド・ホワイトは、アメリカのいわゆるゲイ・ライターの中で、最も高い評価を受けている作家の一人。すでに日本でも小説が二冊紹介されている(『ある少年の物語』, 柿沼瑛子訳, 早川書房, 1990。『美しい部屋は空っぽ』, 柿沼瑛子訳, 早川書房, 1990)が、数年前からはパリに住んで本書を中心に執筆活動を続けてきた。

さてジュネの死後、本書以前にも、二冊の重要な伝記的研究がすでに世に問われている。Jean-Bernard Moraly, *Jean Genet, la vie écrite*, La Différence, 1988, (『ジャン・ジュネ伝』, 平井啓之監修, 柴田芳幸訳, リプロポート, 1994)と, Albert Dichy & Pascal Fouché, *Jean Genet, essai de chronologie, 1910-1944*, Bibliothèque de littérature française contemporaine, 1988, がそれである。モラリーの本は一応作家の全生涯を対象とし、ジュネとバーナード・フレッチマン——ジュネのアメリカでのエージェントであり、ジュネの作品の大部分を英訳したが、のちに自殺——との関係には比較的多くのページを割いている。演劇関係の資料を豊富に提供しているのも特徴の一つだろう。しかしジュネの母親や犯罪歴などに関しては、全く推測的なことを述べているに過ぎない。この点を補うのがディシー&フーケの年譜で、裁判関係の資料などを丹念に集めており、優れた実証的研究として評価されている。ホワイトの伝記も、前半の記述はこの本に負うところ大である。しかしながら年譜は、ジュネの文学的デビューの時点(1944年)までに叙述を限っていたため、モラリーの仕事を発展させ、後半生の伝記的事実を収集することが、ジュネ研究において広く待ち望まれていたのである。

本書は、事実のみを坦々と羅列した書物ではない。随所にホワイト自身の解釈が差しはさまれている。ジュネの作品に対する解釈、ジュネや周囲の人間の言動に対する解釈、そして伝記的事実と作品とを関係づける解釈。むしろ、これらの解釈に対して全面的に賛成する必要はないけれども、ホワイトの「読み」が全般的に優れたものであり、様々な洞察に富んだものであること、この点はいずれにせよ認めておくべきだろう。もちろん、一つの疑問が予想される。ジュネの作品と生涯を一体のものとして見做すこうした態度は、サルトルの『聖ジュネ』の視点といったいどう違うのか、と。作者を捨象してテキスト内の意味作用分析に専念する研究と比べれば、確かにホワイトの態度はサルトルのものとは絶対的に異なっているわけではない。しかし相対的な違いは、当然ながらあまりにも大きい。

まず、サルトルの本は1952年に刊行されたため、劇作家としてのジュネはそこでは本格的な議論の対象になっていない。当然、ジュネの後半生も空白のままに残されている。次に、ホワイトはサルトルとは違って、未刊行の文献資料に加えて様々な関係者の証言を幅広く集めている。出版者マルク・バルブザとその妻オルガ、ジュネの恋人だったジャヴァ、友人だったジネット・セネモー、モニク・ランジュ、ポール・テヴナン、ライラ・シャヒードらのインタビューでの言葉は、一般読者が初めて知ることにな

る貴重な情報に他ならない。本書にもある通り、サルトルにとって、人々の証言は余計で邪魔な代物だったのだろう。ジュネは『聖ジュネ』執筆中のサルトルと頻繁に会い、議論を交していたのだが、自分の過去についてはしばしば嘘を語っている。一方サルトルは、ジュネのミスティブイケーションと自己正当化の中に、実存的精神分析の格好のモデルを見出したと信じた。二人の間には共謀が存在し、その結果実証的な詰めは異常に無視されたのである（例えば、ジュネが里子に出されたのは生後七ヶ月で、『聖ジュネ』にある七歳のときではないのだが、これは精神分析的解釈においては決定的とも言える誤りだろう）。ホワイトの場合、作品と生涯とを結び付ける際には、細かな事実を押さえた上で分析を行っている。またジュネの生涯を、分裂を孕みながらも一貫した意識のドラマに回収するような哲学的図式には、一定の距離を置いているように思われる。

多彩な資料によって、ジュネの後半生をより正確に展望できるようにした点が、本伝記の最大の功績の一つである。ジュネの政治的テキストやインタビューを収めた *L'Ennemi déclaré*, Gallimard, 1991, あるいは最後の大作 *Un Captif amoureux*, Gallimard, 1986（『恋する虜』、鶴飼哲／海老坂武訳、人文書院、1994）を読む際に、本書は様々な文脈を明らかにしてくれることだろう。もちろん、実際は約六年に及んだ軍隊生活——『泥棒日記』では入隊直後に脱走したことになっている——や、ヨーロッパ放浪時代に関する記述も非常に面白く読める。コクトーとの交流や、恋人リュシアン・セネモーおよびアブダラーとの波乱に富んだ関係は、奇妙でしばしば感動的ですからある。また、優れた伝記においては当然のことながら、ホワイトが詳しく描いているジュネの幼少年時代の歴史的・地理的背景も実に興味深い。例えば、ジュネは四歳から八歳の頃まで、ほとんど女性ばかりの里親の家庭で、「小さな王様のように」甘やかされて育ったのだが、それは若い男たちがみな第一次世界大戦に動員されたためだった。この事実はジュネの文学を考える上でも重要なものだろうが、精神分析的解釈を施す際に、子供と両親との関係だけを超歴史的なものとして取り出すべきではない、ということを我々に改めて教えている。精神形成に大きな役割を果たす幼年期も、その他の時期同様、家庭や地域を通じて、否応なしに社会や世界史的出来事へと接続されているのである。

もう一つ付け加えておくと、本書ではジュネとアメリカの作家たち——ウィリアム・バロウズ、アレン・ギンズバーグ、テネシー・ウィリアムズら——との関係についても若干のページが割かれている。こうした文学者たちとの比較・対照研究の領域でも、今後おおいに成果が期待できるだろう。

なお、原書に対して仏訳版では、叙述の順序が変えられたり、加筆が施されたりしているようである。